
ロンドンオリンピックとフランスの エンターテインメント文化の確認

The check of the London Olympic Games
and the entertainment culture of France

一般社団法人日本イベントプロデューズ協会 会長 清水 卓 治
(株式会社シミズオクト会長)

Chairman JEPC (Chairman Shimizu Octo, Inc.) Takuji Simizu

はじめに

9月9日 ロンドンオリンピックの真髄を把握し、フランスでは、エンターテインメント文化の最高水準に出会うツアーに出発した。

ロンドン到着。ヒースロー空港は、拡張を続けていまや第5ターミナルまでである。

拡張できない成田とは大違いだ、第3ターミナルに着機したので、かなりの距離を歩かされる。やっとついた入管ゲートは到着便ラッシュでチェック待ちにおよそ1時間。長旅の拳句に1時間の立ちっぱなしは大変だった。

ロンドン視察

1. ウェンブリースタジアムの視察

2日目(9月10日)。いよいよ、サッカーの聖地見学であると張り切る。スタジアムをつぶさに見て回ることを許された。

ウェンブリーは民間の建物だが、ナショナル級の試合のみ20試合、その他のイベントを18回の計38日稼働している。それ以上は、附近が住宅地であるため、近隣公害予防のため制限されている。イベントが多用されるので、設備に各種の工夫を凝らしている。

芝生プラスチック繊維 3%の人工芝に天然芝の植生をからませている。芝生の酷使に耐えて、丈夫だ。

イベント舞台設営のため、西側スタンド1階部分が、2階下へセットバックできる。また、南

側スタンドも同様。

天井板が南と東西方向から移動出来る様になった。芝生への日照時間が最大限になるように動かせると同時にイベント時、水濡れ防止に相当効果がある。これらのことは、これから立て替える国立競技場の参考に取り入れなければならないと思う。

2. ストラドフォード周辺(オリンピックパーク)

整備地の駅前に巨大なショッピング・モールを作り、その奥にスタジアムや、展示場、プールなどがレイアウトされている。その構想力に感銘する。ショッピング・モールにはデパートをはじめ、スポーツ、ファッション、飲食、ブランドが軒を連ね、終了後の街の繁栄とスポーツ観戦のアメニティを保障している。スポーツ公園だけの概念でできている日本の官制のスポーツ施設となんという違いなのだろう。

3. テニスの聖地ウインブルドン

3日目(9月11日)。大昔、はじめてテニスの仕事をしたのは、東京の田園コロシウムというところだった。専用のテニスのスタジアムに感心したものだが、それ以来ボルグやマッケンロー、ナブラチロアがサーキットで戦う場所は代々木競技場か、東京体育館になり、遂には有明コロシウムになってしまった。世界の頂点にある、ウインブルドンを改めて確認したい念願が今日叶えられた。

荘厳なキングスクロス駅より地下鉄にて 30 分ほど。駅を降りるとすぐもうウインブルドンだ。商店などはなく静かだ。

まず、案内してくれたのは、センターコート裏側にある広場である。そこは 1 万 5 千人のセンターコートに入れない人が、幅 40 メートルの大型映像を見守るという場所だ。そして恐る恐るセンターコートに案内される。グリーン一色で、広告などは一切ない。至って地味なものだ。

シートの上の屋根があり、客席にはエアコン、放送や王族の BOX などがある。芝生の管理には 14 名の専属の要員が最高の注意を払っており、センターコートは、チャンピオンシップ以外には使わせないという。

ウインブルドンはオールイングランドローンテニス&クロケットクラブといい、メンバーはいくつかの種類があるが、空きがないと入れないが、会費は安い。54 面のコートがあり、第 1 コート 11395 人、第 2 コート 4063 人、第 3 コート 1982 人、そのほか 19 コートまで固定席がついている。これらのコートにはコートの両端に巻き取りパイプを備えたテント式のカバーがあり、急激な雨天中止の間に芝が濡れないよう保護装置がついている。

男子、女子、ダブルス、等々各チャンピオンシップが始まると各試合、特に最終日のチケットを手に入れるのは容易ではない。また、試合が始まると、観客は移動禁止となるので、見る方も辛抱がいるが、熱心なファンに支えられて、ウインブルドンは毎年改善を加えているのです。という説明だった。

この偉大なセンターコートで 7 回もチャンピオンになった男が二人、レンショウ (1881 ~ 1889)、サンプラス (1993 ~ 2000) 女子はナブラチロアが 9 回 (1978 ~ 1990) も居る。テニスの奥の深さをしみじみと感じ感無量だった。メンバーになるとテニスウェアは真っ白なものを着用が義務つけられるそう。記念に真っ白なウインドブレーカーを買った。

4 . BUURO HAPPOLD

ロンドンオリンピックスタジアムの基本デザインを担当した、世界的建築・環境・インフラコンサルティング会社である。ダブリン、ソチ、インド、カザフスタン、ロンドン、エミレイツなど世界中の巨大スタジアムを担当した。

日本から東京オリンピック誘致の勉強に来たという理由で極めて歓迎され、ミーティングとなった。特に、開会式の素晴らしい演出は、設計段階から、議論され、計画されたものだという。

この点こそシミズオクトが、長年に亘り最も苦労してきたことである。

吊り荷重、吊り点、床方式 (舞台の昇降、移動装置を含む) 芝生の下に必要な電源、水、ガスその他を引き入れるための暗渠、といったものが演出上の要求として常に起きる。これなくしては、北京やロンドン並みの演出効果はありえないということである。

開会式の素晴らしい演出を見て、疑問に思っていたことが、ここへ来てなるほどと思った。

5 . JETRO ロンドン所長 有馬純氏 (小坂、石山両氏)

4 日目 (9 月 12 日)。昨年お会いしていた、前パリ JETRO 所長の大下さんの御紹介でロンドン JETRO 所長の有馬純氏にお会いし、ロンドンオリンピックについての現地情報を受けた。(この項は、小坂・石山レポートに任せる)

総じて、オリンピック後のレガシーとして、テムズ河の浄化、ストラトフォードの大企業モールや、学校への寄与、スイミング・センターの仮設観覧席を撤去し、学校プールになる、また選手村の再利用や、セキュリティーのボランティア組織 2,500 名の存在など、ロンドンの街全体でオリンピックをお迎えした効果が現れたとされています。

東京都秋山副知事もアテネのオリンピックの巨大施設新設負担の重みなどで、ギリシャ財政危機の発端となったことに比べて高く評価されています。ロンドンのやり方を参考にしたいとの見解がよく理解できる。

以上のような現地情報を頂いた。我々のツアー

では、9日にパラリンピック閉会式を参観してその雰囲気に触れる事ができ 幸いな調査研究ができた。

6 .ウエンブリー・スタジアム 国際試合(ワールドカップ予選イングランド対ウクライナ - 戦)
パンクロス駅から6 駅、ウエンブリーパークという地下鉄駅を降りると、既に人の波である。

127 ゲート、32 列、142 番 55 ユーロである。スタンドは椅子幅がひろくゆったりと風が通り、実に気持ちが良い。移動式の屋根は動かされ、サッカーモードになっている。場内最前列の柵は、横倒しのまま使用され、乱入防止にスチュワードが一周 40 名、その他 100 人位が配置についている。場内音響はスタンド屋根下に吊るされた沢山のスピーカーが効果的大音量で流される。

・ フランス視察

5 日目 (9 月 13 日) フランスへと向かう。

パリ着。窓から見るパリの空は青く、雲の形もロンドンとは違ってオシャレだ。

午後、近くのカフェにて早速小坂氏、石山氏とロートル3人でワインとスープを楽しむ。ゆったりとくつろぎ至福の休憩時間だった。(その後は各人のプログラムによった)

6 日目(9月14日)。モンパルナス駅よりTGVに乗りナントへ。モンパルナス8:55発11:00ナント着。

1 .「ラ・マシーン」社訪問

トラムに乗り6 駅先にラ・マシーン社訪問する。元造船所が、ナント市の応援を得て、その鉄工技術を生かして、夢のマシーンを作り続けてテーマパークに衣替えしている。

夢のマシンの第1号は、マリンワールドカールゼルメリーゴーランドである。海底、水中、水上のそれぞれの生物が動くように作られよく出来ているので興味満点である。8ユーロで、テーマ・パーク営業をしている。

第2号は巨大マシーン作りである。「07年象」「09年蜘蛛」など、世界各地の周年行事にいろいろな作り物を提供した。象は8ユーロで構内を40分で1周する。

第3号は、シップヤードパークで、ガーデン、パテオ、広場、HERONTREEという巨大な人工樹からなり、40メートルの樹上をHERONコウノトリが翼を広げて旋回する。翼には4個の籠が吊るされ、観客を乗せて恐怖と興奮を味わう仕組みであるという。これには、あと6年かけるそうだが、実はディスカバリーモードと言って部分模型を展示して、想像をさせながら、疑似体験するテーマパーク営業をしており、これも8ユーロである。

我々は、順繰りに視察した最後に、組み立て工場を見せて貰った。工場は仕事が一段落し、長期バカンス中で、作り物はなかったが、工場の配置等参考になった。今回のツアーに組み入れ、大変に素晴らしい視察だった。

2 . ナントからピュイ・ド・フーへ

7 日目 (9 月 15 日)。7:30、今度は大きなバスで出発。今日も絶好の行楽日和である。気温は低いがちっとも寒くは無い。国道から細い曲がりくねった道をたどり、ようやくル・ピュイ・ド・フーのホテルに横付け。小坂氏、石山氏、清水のロートル3人はクロービスという藁屋根、土壁の農家風1軒屋ホテルだ。中はまったく質素そのもの。若い人たちはノクターンという城のようなホテルだ。

(1) Grand PaRc

(この項は同行メンバーのレポートによる)

(2) 「シネセニー」鑑賞 22:00

このテーマ・パークの最大の呼び物は夜10時から、終演は12時の夜中という時間帯である。田園都市で3万余の観客をこの夜中に集める驚異のスペクタクルだ。

2年ぶり(船山・小坂両氏と)だが、すべてに手が加えられ、進化が素晴らしい。

白馬隊約20頭がそろいなんとビュティフル

だ。馬、羊、豚、家鴨。全面のスペースに沢山の舞台機構が加えられた。バラジオ級の大噴水とウォーター・スクリーンによる映像演出の多用。

下手袖ステージに水車小屋、など披露しきれない改良。

Grand Parcは会社で、「シネセニー」は地元市、スポンサー団体との協同企業体組織である。ここまでのスケールには、当然大きな資本力がある。改良も毎年継続している。日本と比べて、文化を大切にしたい進歩と改良に脱帽した。

8日目(9月16日)。

5:00 ホテル出発。6:35 ナント空港発。

4時のモーニングコール、4時半に朝食と甚だ



キツ過ぎる帰路である。なんとか、みんな脱落せず勢ぞろいは立派だ。

バケージはスルー扱いだ、パリでの乗り換えは、ゲートアウトしたため、大混雑にびっくりする。

ドゴール空港着 8:40。ドゴール空港発 11:00。
JL42 は 40 分遅れ出発。

9日目(9月17日)。

羽田到着は大変有り難い。移動が多く、きつい視察スケジュールだったが、未知への興味で、全員なんとか頑張り、素晴らしい成果を得た。

